
トルコ系移民のドイツ語,,Kanak Sprak“は誰のもの？

－ 言語変種の混交、そして越境 －

田中 翔太

1. 渡独したトルコ人

2010年現在、ドイツ連邦共和国にはおよそ8200万弱の人々が暮らしている。ドイツの連邦統計局で2009年末に出た統計結果を見ていくと、総人口の中で移民背景を持った人がおよそ1570万人、¹⁾ 外国籍を持つ人が約670万人、ドイツ国内で生活していることになる。²⁾ つまり、総人口のおよそ8.2%が外国人であるということになり、このことからドイツがいかに多文化の混在した国であるかを読み取ることができる。³⁾ 本論文の対象とするトルコ系移民については、ドイツ国内に現在およそ165万人のトルコ国籍所有者が暮らしており、⁴⁾ 外国人全体の4分の1弱を占め国内で最も多い外国人として認識されている。しかしながら、一体なぜ現在のように多くの外国人がドイツへと生活の場を移すようになったのであろうか。また、どうしてそれほどまでに多くのトルコ系移民がドイツへとやって来たのだろうか。

トルコとドイツ両国の現在に至るまでの経緯を知るためには、第二次世界大戦中まで遡る必要がある。「1933年、ナチス政権下の旧ドイツ第三帝国で新たな外国人労働力受け入れの波が起こった」（野中2007:1頁）。1950年代半ばになると、旧西ドイツは経済的に急激な戦後復興、高度成長を遂げる。本来働き手となる若い男性が多く戦死するなどして、当時の旧西ドイツの労働市場では労働力の不足が顕著になり、1955年12月にイタリアとの協定でガストアルバイター（Gastarbeiter）、いわゆる外国人労働者の受け入れを開始した。当初はイタリアやポルトガルなど、南

1) Statistisches Bundesamt Deutschland (2010b: 378 頁) を参照。

2) Statistisches Bundesamt Deutschland (2010a: 23 頁) を参照。

3) 例えば2004年の統計において、移民国家と呼ばれる隣国フランスの外国人人口は総人口の5.6%であり、その時点でのEU加盟諸国内でのドイツの外国人人口は、全25カ国中6位である（Eurostat: 2 頁を参照）。

4) Bundesamt für Migration und Flüchtlinge (2010: 11 頁) を参照。

欧諸国との取引が主であったが、1961年になるとトルコとの間でも労働力に関する協定が結ばれる。

そして1973年までに、およそ400万人もの外国人がドイツ国内で生活をするようになる。彼ら外国人労働者は当初、契約を結び一定期間が経過すると再びそれぞれの国へ帰る手はずでやってきたのだが、雇用者側の都合により、せっかく鍛錬した労働力を短期間で祖国に帰すことは非効率であるとしてそれを拒まれた。また労働者側も長期滞在に伴い祖国から家族を呼び寄せたこと、さらに1964年にドイツ外務省がトルコ人労働者に対する2年間の滞在期間制限を撤廃したことにより、ドイツ国内の特にトルコ人の割合が急激に増えていった。⁵⁾そして1973年になると、当時の日本の経済状況も揺るがした石油危機が世界を襲い、この時点で外国人人口は安定するが、ドイツへ渡って来たトルコ人が大量に帰国するようなことにはならず、結果多くのトルコ人がドイツへと残る形となった。1983年になると外国人家族の呼び寄せを厳しくする法案、「外国人帰国促進法」が可決されるが、それでも多数の外国人労働者が帰国するには至らなかった(八谷2007: 82-85頁を参照)。これには、いざ帰国したところで再びトルコ側の文化、生活に適應できなくなっているからという理由も挙げられる。しかし、移民二世になると、自らのアイデンティティを求めてトルコへと戻っていく者の姿も見ることができるようになってくる。⁶⁾

1989年になりベルリンの壁が崩壊すると、ドイツ国内において初めて、移民に関する具体的な報告書が出される。それが、当時の外国人問題担当官であるハインツ・キューン(Heinz Kühn)によって世に出された「キューン覚書」である。この中でキューンは、ドイツは「事実上の移民国家になっているのであるから、外国人政策についてもそのことを前提として、外国人の社会的な統合に重点を置かなければならない」(八谷2007: 86頁)として、その頃二世になり始めた外国人の扱いに対して注意を喚起した。

その後、トルコ系移民を取り巻く状況というのは一体どのように変化したので

-
- 5) これには労働者としてだけでなく、クルド紛争により渡独してきた難民も含まれるからである。
 - 6) この点について詳しくは、自身もトルコ系移民の二世である映画監督、ファティ・アキン(Fatih Akin)の作品で見ることができる。アキンは自らを「ドイツ人とトルコ人の『あいだ』と捉えて」(和泉田2006: 62頁)おり、二世であるという立場を彼ほど「意識的に文化的葛藤を軽妙に描く監督はいない」(同: 65頁)と述べている。

あろうか。現在ドイツにおいて、トルコ系移民の人口が2万人を超える町では、トルコ系移民のための居住地が形成されるようになってきている（野中 2007: 62 頁を参照）。そのような居住地区は、ドイツ人から「ゲッター」や「イスタンブール」等と揶揄されることも多い。⁷⁾ 実際ドイツでのトルコ系移民の生活は、パラレル・ワールドと称されるほどドイツ人の日常生活から切り離された場所で営まれており、ふたつの民族を取り巻く状況が時代とともに多少なりとも良くなってきたとは言え、未だにこのパラレル・ワールドの構造は変化していない。筆者自身も 2007 年から 2008 年にかけてのマンハイム滞在の折に、その印象を強く受けた。

もともと外国人労働者として渡独したトルコ系移民は、より良い生活、より良い仕事を得るために旧西ドイツへとやって来た。それゆえ当時渡ってきたほとんどの外国人労働者は、祖国でもいわゆる社会の下層部に属し、学校へ行けない人も多かった。そうした人々がドイツで働き暮らすことで、教育面にも影響が出てきていると言われている。2000 年に初めて行われた学習到達度調査（略称: PISA）において、ドイツは先進諸国の中でも最悪の結果を出してしまう。特に州別に結果を見ていった際、移民が最も多く住み、ドイツ全土の約 3 分の 2 のトルコ系移民が生活しているといわれているノルトライン＝ヴェストファーレン州で成績が最も悪かったため、ドイツ政府は改めて移民に対する教育の見直しを検討し始めた（八谷 2007: 106 頁を参照）。この PISA 問題を受けてドイツでは、2001 年に移民に対する教育の充実を項目のひとつとして掲げた「教育フォーラムの勧告」、また 2005 年に語学講座の受講の義務化、移民者の社会的統括を目的とした「移民法」を施行した。

2. スポットライトが当てられたトルコ系移民の言葉 „Kanak Sprak“

このようにドイツ政府は移民国家としての在り方を認め、具体的な行動に移していったわけであるが、現在ほど移民に対する教育制度が整備されていなかった 1995 年に、ある一冊の本がトルコ系移民の出自を持つ作家によってドイツ国内で

7) 野中 (2007: 51 頁) に、ベルリンのクロイツベルクを例にこの特徴をよく表す一文が見られたので、以下本文をそのまま引用する。「この街はまたトルコ人の多いことでも有名だ。住民の三人に一人はトルコ人というヨーロッパ最大の『トルコ人ゲッター』である。[...]トルコ人のあまりの多さに『クライナー・イスタンブール』とか、ニューヨークの黒人街とトプカプ宮殿の後宮を結びつけて『ベルリン・ハーレム』、また新文化を創造する芸術家の多いことから『モンマルトル』とも呼ばれている。

出版された。書名は、『カナークの言葉：社会の周縁の 24 の雑音』(*Kanak Sprach: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*) で、著者はフェリドゥン・ザイモグル (Feridun Zaimoglu) である。ザイモグルはこの本の中で、さまざまな境遇、職種
のトルコ系移民 (主に若者) が実際に話した言葉を集めて、それに「カナークの
言葉」という名称を与えた。

この「カナーク」(*Kanak*) という語自体は、決して新しいものではない。DUDEN
の辞書においては既に 1976 年の時点で、この語についての記述が見られる。元々
この語は、ザイモグルが上述の著書で述べたような意味は全く持っていない。ポリ
ネシア語で「人間」という意味を持つ *kanaka* に由来する *Kanake* というドイツ
語の名詞は、「ポリネシア島、また南太平洋諸島の原住民」(DUDEN 1976: 1415
頁) という意味で使用されていた。この語は、19 世紀にポリネシア系、オセアニ
ア系の仕事場における同僚を呼ぶためにドイツ人の船乗りたちによって用いられた
もので、その頃はほぼポジティブな意味合いを持って使われていた。ところが
その後意味合いが変わっていき、総じて南国風の容姿をした外国人に対して使う、
差別的な言い回しへとなっていった。特に 1970 年代になると、ドイツへと働きに
やって来た外国人労働者、この頃は主にイタリア人、スペイン人またはギリシャ
人に対してこの表現が使われるようになる。1976 年に出版された DUDEN にも、
上記の意味の他にもうひとつ、「教養がなく、無知な人間」という意味も記載され
ている。この語はその後、アラビア人、ペルシャ人、トルコ人、クルド人、南欧、
東南欧の人々に対する蔑みの言葉としても用いられるようになった。

自らもトルコで生まれて間もなく両親に連れられ渡独してきた経歴の持ち主
であるザイモグルは、社会の周縁に属するトルコ系移民の声を著書の中に集める
ことを目指した。つまり、彼の著書刊行の意図は、「移民三世、四世にあたるトル
コ系の若者たち、中でも特に、教育や就業のシステムの外側にいる者たちが、
マジョリティとは違うアイデンティティ、正しいドイツ語とは異なる言語を、彼
ら独自のスタイルとして発信する場を」(浜崎 2005: 12 頁) 作ることであった。
その際に、その「正しくないドイツ語」を、敢えて自虐的に「カナークの言葉」
と呼んだのである。ザイモグルは、カナークの言葉を以下のように定義づけてい
る。

もうとうの昔から、彼ら（トルコ系移民）は地下規範（Untergrund-Kodex）を發展させ、独自の隠語を話してきた。カナークの言葉は一種のクレオール語、もしくは謎めいた暗号や記号の含まれる隠語である。彼らの話し方はラップ音楽における自由なスタイルの内容空疎なおしゃべりと似ている。どちらの場合も、ある自由奔放なポーズから話されるのだ。この言語が（彼らの）存在を明瞭化する。全くもって私的なイメージを単語の中に与える、それがカナークの言葉である。（Zaimoglu 1995: 13 頁）

ザイモグルはこのカナークの言葉について、さらに次のように説明している。

カナークの言葉の自由さは、句読点が全くつかず、絞り出されるように、せわしく、そして混成したどもり話から成り立っている。好き勝手に置かれた会話の休憩、そして即興的な言い回しとともに。カナークは、彼らの母語を不完全に、ドイツ語も限定的にしか知らない。カナークの語彙は、どちらの言語にも起こり得ないごちゃまぜの単語や語法から構成されている。（Zaimoglu 1995: 13 頁）

この引用箇所からも読み取れるように、カナークの言葉とはトルコ系移民が話すトルコ＝ドイツ語のことで、トルコ系移民によってドイツ国内で形成された一種の社会方言（Soziolekt）と見なすことができる。⁸⁾ ザイモグルがこの言語変種を Kanak Sprak という名称によって把握し、それを著書の中に書き留めることによって、トルコ系移民の話すドイツ語にスポットライトが当てられ、その存在が見えてきたわけである。

3. メディアの中の „Kanak Sprak“

存在が顕在化したこの Kanak Sprak について、現在ではトルコ系移民たちは恥じるべきものであるとは思っておらず、逆にある程度自ら誇りを持っている。ここに至るまでの過程には、少なからずメディアの存在が影響している。ザイモグルが 1995 年に彼の著書でカナークの言葉を定義づけた 90 年代半ばから、ドイツ国内においてエルカンとシュテファン（Erkan und Stefan、両者とも 1979 年生れ）

8) この見解は Auer (2003) の論に拠っているが、詳しくは以下の第 4 章を参照。

やカヤ・ヤナール (Kaya Yanar, 1973 年生れ) のようなコメディアンが台頭し始め、トルコ系の舞台芸人であるゼダ・パムク (Sedat Pamuk, 1952 年生れ) やビュレント・チェイラン (Bülent Ceylan, 1976 年生れ) が、トルコ系移民の若者のコミュニケーション行動を様式化して世に広めた。そして特に、ヒップホップ音楽に彼らの言葉が取り入れられるようになり、2000 年代になってクールな言葉として注目されるようになる。それら一連の流れは、トルコ系移民の存在を改めてドイツ国内に認識させるきっかけとなり、またトルコ系移民が自らの民族としての誇りを取り戻す理由となった。それによってドイツでは、トルコ系移民の話す言語は今までの傾向とは反対に、ポジティブな意味で捉えられるようになってきたのだ。ただし他方で、「暴力、麻薬、窃盗、グループ間抗争などが描かれた映画『カナケの攻撃』が、トルコ系移民の若者は犯罪予備軍であるというステレオタイプを作り、移民の若者たち自身のアイデンティティを崩した」(浜崎 2005: 14 頁) というネガティブな一面が存在するのも事実である。⁹⁾

マンハイムのドイツ語研究所 (Institut für deutsche Sprache) の言語学者であるインケン・カイク (Inken Keim、ただし 2010 年現在定年退職している) は、このような経過を踏まえて、2002 年に著書『社会文化的自己定義と社会的文体：ドイツ系トルコ人少女たちの会話』(*Sozial-kulturelle Selbstdefinition und sozialer Stil: Junge Deutsch-Türkinnen im Gespräch*) という著書の中で以下のような見解を述べている。

幾つかのドイツの大都市では、ある特定のトルコ語の形式、あるいはトルコ系の若者の話す言葉の形式が、若者にとって威信に満ちたものへと発展している。この大都市環境の若者の言葉とコミュニケーション行動について、既にメディアでは命名がなされている。それは、「ヒップホップ音楽に影響を受けたドイツ系トルコ人たちの通用語」、もしくは「粗野崇拜」(Proll¹⁰⁾-Kult) である。(Keim 2002:

9) これについて Keim (2007) は、様式化されたトルコ系移民の主に男性の若者が、「僅かな教育、偉ぶって過剰な男性意識を持ち、合法ギリギリのラインで生き、好戦的で奇妙な、カナケの言葉話す」(Keim 2007: 129 頁) 者として特徴づけられていると述べている。

10) この語はドイツ語の *Prolet* から来ており、元の意味は「(軽蔑的に) 粗野な (がさつな) 人間、田舎者」であった。そこから派生して、現在では *prollig* などと形容詞として使われて、「粗野で教養のない」といった意味として捉えられている。そしてこの *prollig* という形容詞は、今ではトルコ系移民の若者を特徴づける重要な役割も担っている。

233 頁)

カイクは、『南ドイツ新聞』(Süddeutsche Zeitung) とのインタビュー (2007 年 3 月 19 日) の中で、これらの TV メディアでの取り挙げられ方を疑問視している。特にシュテファンとエルカンというコメディ・デュオについてカイクは、以下のよう述べている。

しかしながら、メディアでは頻繁に大袈裟に描かれすぎている。もし若者がそこから何かを得ようとするならば、推測されるにそれはどちらかという和一時的な流行現象だろう。(http://www.sueddeutsche.de/wissen/60/324925/text/)

つまり、カナケの言葉は TV メディアが頻繁に映し出すことで若者へと伝わっていった一種の造られた言語であるという見方ができる。TV メディアにおいて紹介されるカナケの言葉は、実際にトルコ系移民の間で使われているドイツ語とは似て非なるものである可能性があるのだ。

あるインターネットのサイトに、カナケの言葉で書いたものとして匿名者が『ヘンゼルとグレーテル』のテキストを掲載している。この匿名者は、カナケの言葉を次のように特徴づけている。

カナケの話す語彙は、およそ 300 の単語から成り立っている。その中の 3 分の 1 が排泄(例えば *Scheiße* 等)、もしくは性的な領域からなる暴力的な表現であり、もう 3 分の 1 が車のメーカー並びにそのモデルと変種である。そして残りの 3 分の 1 が、接続詞や携帯の型の名前、そして話を理解させる上で必要不可欠な単語である。それから、ほぼどの文章の終わりにも以下のような典型的なフレーズが見られる。例えばそれは、*weisstu* であったり *Alder*、もしくは *isch schwör* であったり *weisstu wie isch mein* であったりする。

(http://www.derweg.org/aktuell/deutschland/vollkrass.html)

匿名者は、「これだけ少ない単語でどのようにして全てを表現しているのか、にわかには信じがたいことだ」と述べているが、この匿名者が「300 の単語」し

かないと言い切っている時点で、カナークの言葉に対する不当な限定、もしくは偏見ないし茶化しが存在する。実際にトルコ系移民の間では、300 の単語しかないと言うのであろうか。そのような問題性を含むものと認識した上で、この『ヘンゼルとグレーテル』のテキストから見て取れるカナークの言葉の特徴（とされるもの）を見てみよう。原文テキストは、本論文の巻末に挙げたものである。

まずこのテキストの中でいちばん目につくのは、*ch* という音がたびたび *sch* で書かれている点だ。この点についてはカイクも既に述べているのだが、カナークの言葉の特徴のひとつとして、トルコ系移民は話す際にこの *ch* を *sch* と発音する傾向がある。¹¹⁾ 例えば 11 行目の文頭にある「突然の」という意味を持つ形容詞 *plötzlich* が、ウムラウトを排除した形 *plotzlich* で記載されている。この傾向は他のウムラウトを必要とする語にも見られており、例えば 13 行目の「檻」を表す *Käfig* が *Kafig* に、16 行目の「(家畜を) 肥育する」、もしくは話しことばで「(人を) 太らせる」という意味を持つ *mästen* が *masten* に、「かがむ、身をかがめる」という意味の *sich bücken* が 23 行目で *sisch bucken* となっている。ただ単にウムラウトを付け忘れた誤植という見方もできるかもしれないが、トルコの名物料理である「ケバブ」を表す名詞の *Döner* においては一貫してウムラウトが付けられていることから、ウムラウトの頻繁な欠如もカナークの言葉の言語的特徴として見ることができるだろう。また、通常であれば 2 回で済むが、5 行目や 6 行目を見ると分かるように、*Scheiße* という語を *Schiessse* と繰り返し *s* を 3 回重ねて書かれている点も目を引く。これを、カナークの実際の発音に基づいて記述されたものであると判断するとしたら、彼らには語を強調して発音する特徴があると見なされていると言える。

文法面では、前置詞と冠詞、またそれに伴う格変化に注目したい。例えば 1 行目の *durch Wald* という表現であるが、標準ドイツ語では前置詞 *durch* と「森」を表す名詞 *Wald* の間に、冠詞を置く必要がある。この場合、*Wald* は男性名詞であり、前置詞 *durch* は 4 格支配なので *den* が来るはずであるが、これが抜けている。さらに

11) この傾向は、筆者が 2008 年の春夏学期に受講したマンハイム大学でのカイクの講義、「Kommunikativer Stil und soziale Zugehörigkeit」において行われた内容によるものである。そこでカイクは、*ch* から *sch* への音の移行を「舌頂音化」(Koronalisierung) と呼んでいる。この特徴については、本論文の第 4 章で、実際のトルコ系移民が話す言語特徴として取り挙げる。

同じ行の副文、*auf Suche nach korrekte Feuerholz* を見てみよう。この文も本来の正しい形に直すならば、*auf der Suche nach korrektem Feuerholz* となる。これらを見れば分かるように、形容詞が入った場合の前置詞と名詞の間の格変化も正しく行われていない。それに関連して、これ以後の文でも冠詞的確な使用、前置詞と名詞が隣接した場合の格変化がなされていないことが分かる。またカナークの言葉において、女性名詞がしばしば男性名詞として使われている傾向がある。例えば、「女性」を表す語である *Frau* は女性名詞であるが、このテキストの中では一貫して男性名詞として扱われている。また「魔女」を表す *Hexe* も女性名詞であるが、作中では男性名詞として扱われている。¹²⁾ さらに、ドイツ語において動詞は人称変化に伴い語尾変化が行われるのだが、14行目における *du kochen für mich* であったり（正しくは *du kochst für mich*）、21行目における *Machen das!* であったり（同じく、正しくは *Ich mache das!*）と、動詞の語尾変化がきちんとなされていないといった点も見受けられる。語尾に多用される *oder was* という表現も、まわりに垣根（ヘッジ）をはりめぐらせることによってものを曖昧に表現する「曖昧さのマーカ―」（*Vagheitsmarker*）である（高田 2001: 61-62 頁を参照）。そこから、世代語としてのカナークの言葉、そしてまた「若者ことば」にも含まれるひとつの特徴と言えるだろう。

最後に、使用されている語彙について言及したい。この物語の中ではよく *korrekt* 「良い、正しい」、*normal* 「もちろん」、*krass* 「素晴らしい、ヤバイ」、*Scheiße* 「クソ」、*fett* 「多い、強い、とても良い」、*was geht* 「どうした、何ということだ」また *Arsch* 「ケツ」といったような語が多用されているが、これらが文中でカナークの言葉のつもりで書かれているのか、一般的なドイツの若者ことばとして書かれているのか、その境界線を引くのは簡単ではない。後述のように、ドイツ人の若者自身がトルコ語を意図的に使用することもあるため、¹³⁾カナークの言葉と若者ことばとの境界線は一層曖昧になっている。

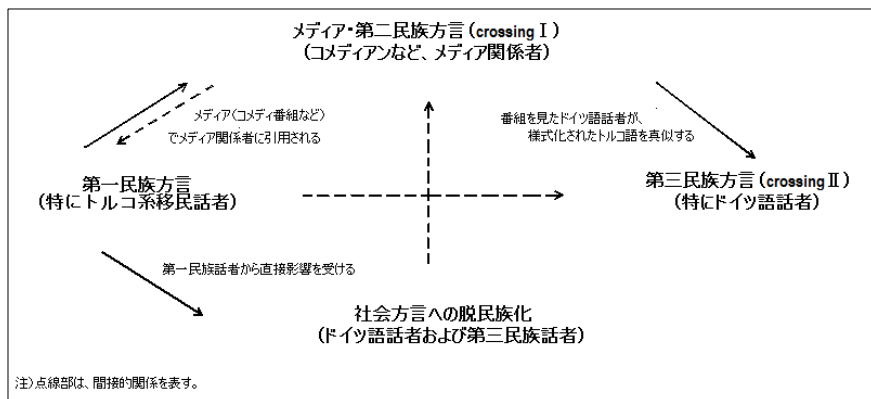
12) 名詞の男性名詞化については、第4章で詳述する。

13) ドイツ人の若者がトルコ系移民の言語を真似る現象の一例としてカイムは、以下のよう述べている。「自らの観察とドイツ・トルコ双方の教師、社会教育学研究者の表現によると、ドイツ人の若者もトルコ語の脅し文句やからみ文句を使用している。その中で例えば、トルコ語の *siktir lan*（「失せろ」）などが挙げられる。」（Keim 2002: 233 頁）そのようにトルコ系移民の言語を真似るドイツ人の若者は、どこでトルコ系移民の若者と接触するのだろうか。その場面は複数想定が可能であるが、トルコ系移民が通う教育機関、また TV メディアといった経路が考えられる。

4. „Kanak Sprak“ は誰が話しているのか？

以上の考察から見えてきた疑問点は、Zaimoglu (1995) の命名したカナークの言葉という概念のもとに、メディアの中の言語変種とトルコ系移民が実際に話す言語変種との両方を理解することが果たして適切であるのかである。この点に関して、Auer (2003) が提案した区別 (図 1) は、極めて多くの示唆を与えてくれる。アウアーは、「トルコ人の通用語」(Türkenslang) という名称で捉え、これを次のようなレベルと段階に区別している。

図 1: 「トルコ人の通用語」に関する段階的モデル (Auer 2003: 257 頁)



アウアーはこの表を用いて、トルコ系移民が話す言語がどのようにして広がり、またそれぞれの段階でどのような言語的特徴が見られるかを、通時的観点を入れて記述している。それぞれの用語についてだが、「民族方言」という語はドイツ語の *Ethnolekt* の訳語である。また、それぞれの下にカッコでその言語の話者を示しており、矢印は点線が間接的影響関係にあるもの、もしくは間接的影響関係にあり得るが、実際に傾向が見られなかったものを指し、通常の矢印は直接的影響が考えられるものを表す。

まザアウアーは「第一民族方言」を、いわゆる大都市のトルコ人街から生まれ、移民背景を持つトルコ系の少年たちによって使用されている言葉と定義し、1990年代半ばにメディアで度々取り挙げられるようになった頃を出発点としている (Auer 2003: 256 頁を参照)。音声、音韻の点からは、第 3 章でカナークの言葉の

特徴として示した *ch* から *sch* への舌頂音化が見られ、この点においてカナケの言葉と実際にトルコ系移民が話す言葉は共通する特徴を有していると考えられる。¹⁴⁾ また「第一民族方言」の言語的特徴について Auer (2003) では述べられているが、そこで第 3 章で分析対象としたカナケの言葉で書かれた『ヘンゼルとグレーテル』との興味深い共通点がいくつか観察できた。

- 1) so ein großes Plakat (標準ドイツ語)
- 2) son großer Plakat (第一民族方言)
- 3) keine richtigen Gruppen (標準ドイツ語)
- 4) keine richtige Gruppen (第一民族方言)

上に示した例のうち、1)、2)については名詞の性の誤りに伴う形容詞語尾の不一致、そして 3)、4)は形容詞の語尾変化の誤りである。なぜこのような誤りが生じるのかを考える際、トルコ語の文法について知る必要がある。トルコ語には日本語と同様に定冠詞や不定冠詞、名詞の性が存在せず、そのことが理由のひとつとして挙げられる。¹⁵⁾ つまり、トルコ語を母語とする人々がドイツ語を学ぶとき、言語干渉としてこのような間違いが生じる可能性が考えられるのである。

次に「メディア・第二民族方言」だが、これは映画やコメディなどの TV メディアにおいて、トルコ系移民の言葉として登場する言語のことである。ただしカナケの言葉を有名にしたコメディアンはトルコ系移民の言葉を聞き手、また視聴者の受けを狙うために大袈裟に誇張して使用しているとも考えられることから、「第一民族方言」と完全に一致する言葉であるとは言えず、様式化された言語であるとする見方ができる。例えばふたりのドイツ人からなるムントシュトゥール (Mundstuhl) というコメディ・デュオが使うカナケの言葉は、「第一民族方言」

14) この特徴については、今では TV メディアでの描写からトルコ系移民の代表的な言語的特徴として数えられているが、実際にアウアーやデッパーマンによる実地調査でも同様の特徴が見られ、またこれには方言の要素も含まれている。例えばヘッセン州での調査の際はこの舌頂音化の現象が見られたが、ハンブルクの調査では全く見られず、またベルリンでも時折見られる程度であった。このことから、この特徴は中央ドイツ周辺における方言特徴として見てとれる (Auer 2003: 258 頁、Deppermann 2007: 329 頁を参照)。

15) ただし不定冠詞についてはトルコ語には *bir* という数詞があり、これがドイツ語における不定冠詞のような役割を担いうる。しかしトルコ語では不特定の情報をこれで必然的に表す必要がないことから、ドイツ語と比較して使用率は少ない。

のほぼ全ての特徴をおさえているが、しかしながら「第一民族方言」には見られない新たな特徴（例えば代名詞としての *das* を、指示代名詞として使用するケース以外において、一貫して *den* という点）を作り出したと言われている (Auer 2003: 261 頁を参照)。

- 5) Das ist so schnell, kann ich nur schätzen. (標準ドイツ語)
- 6) Den is so schnell ich kann nur schätze. (第二民族方言)

そしてその右斜め下に伸びる「第三民族方言」が、TVメディアで様式化され取り挙げられた彼らの言葉を見聞きして、彼らの真似をするドイツ語話者、その中でも特に男性の若者によって話される言語を指す。すなわちこの「第三民族方言」は先述の「メディア・第二民族方言」と直接的な関係にあり、「第一民族方言」との関係は薄れていると言うことができる。

そして最後に、いちばん下にあるのが「社会方言への脱民族化」という項目だ。これは「第一民族方言」から直接矢印が伸びており、さらに話者は「ドイツ語話者もしくは第三民族話者」と書かれている。これはどういうことかと言うと、この社会方言化しつつある言語変種を用いる話者はドイツ語話者、または「第三民族話者」(ドイツ語話者でもトルコ語話者でもない話者)であり、その話者が暮らす生活環境の中にトルコ系移民がいて、このトルコ系移民から直接的に影響を受けて、そのような言語変種を用いるのである。ここでの話者は今まで見てきたような若い男性だけに限らず女性も含まれ、さらにドイツ人の中でもギムナジウムに通うような層の若者が使用する点、そしてこの民族方言の構造はドイツ語の日常会話の中にも吸収されている点から、アウアーはトルコ人の民族方言がドイツ語話者へ普及することによって、ドイツ語の社会方言になりうる可能性を示唆している (Auer 2003: 263 頁を参照)。Auer/ Dirim (2005) によると、とりわけ多民族混成の若者グループやトルコ系移民が多数を占める教育機関では、トルコ語の使用が必然的に伴う。ハンブルクの調査では、トルコ系移民の出自を持たない若者がトルコ語の比較的長い発話をした例が見られた (Auer/ Dirim 2005: 19 頁を参照)。以下、この社会方言化の可能性のある言語的特徴をいくつか挙げる。

- 7) dann bin ich zwei Jahre aufs Gymnasium gegangen (標準ドイツ語)
 8) dann bin ich Gymnasium zwei Jahre gegangen (社会方言)
 9) aber der eine wollte doch deutsches Geld haben (標準ドイツ語)
 10) aber der eine wollte doch deutsche Geld haben (社会方言)

8)では冠詞と前置詞の欠如、10)では性の不一致が起きている。これらは、ヤニス・アンドロツォポロス (Jannis Androutsopoulos) がトルコ人のドイツ語の特徴として挙げる「冠詞と前置詞の省略、例えば *isch gehe [zum] bahnhof*、そして同様に文法の性の誤り」(Androutsopoulos 2000: 4 頁) と一致する。¹⁶⁾

5. 言語の改新から言語変化へ

1990年代半ばにザイモグルが命名するまでの間ずっと不透明な存在だったトルコ系移民のドイツ語が、カナケの言葉という名称を得て、その存在が顕在化した。それが、一方ではメディアに取り上げられその中で様式化されたために、また他方ではトルコ人以外のドイツ語話者にもこの言語変種が浸透し、「越境」していったため、「カナケの言葉」、「トルコ=ドイツ語」もしくは「トルコ人の通用語」などさまざまな名称で呼ばれるものが指す対象が多様化し、また複雑化していった。これから、この言葉がどうなっていくのだろうか。ザイモグルはインタビューで、カナケの言葉の将来について次のように述べている。

この思春期を迎える前のようなカナケの言葉というのは、他の流行と同じようにいつかは終わるだろう。けれども、カナケの隠語は独立したドイツ語として発展し続けると思われる。(http://www.derweg.org/aktuell/deutschland/vollkrass.html)

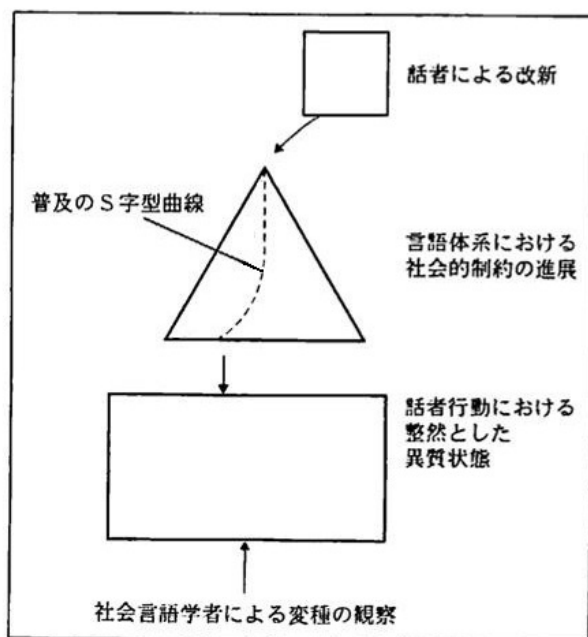
果たして、カナケの言葉は実際に、「独立したドイツ語として発展」するのであろうか。また、トルコ系移民のドイツ語を、アウアーが図で分けたように通時

16) この見解については、筆者が2010年3月12日にドイツ、マンハイムのドイツ語研究所でアーヌルフ・デッパーマン教授 (Prof. Dr. Arnulf Deppermann) と面談をした際に、彼も支持するとの見方を示した。デッパーマン教授は、この統語論的な言語特徴は将来的にも口語に限って言えば残りうる特徴のひとつであり、現在ではドイツ人の間でも使われる例であると解説した。

的に段階を追って捉えることはできるのだろうか。アウアーの図で分かるように、トルコ系移民の用いるドイツ語は決して静態的ではなく、これからも音声、文法、語彙の面で変化を遂げていく可能性があると言える。

トルコ系移民のドイツ語が「越境」して、ドイツ人のドイツ語話者にも入っていくプロセスを考えると、イギリスの歴史社会言語学者ジェームズ・ミルロイ (James Milroy) が提唱した言語変化のモデルは極めて示唆的である。ミルロイは、「共時的状態というのは、実際は変化しつつある状態であり、ソシュールが前提としたような言語の安定状態は理想化」(Milroy 1992: 3 頁) に過ぎないとしている。その上でミルロイは、言語変化のプロセスを次の図2のように考えている (Milroy 1992: 169-172 頁、高田 2009: 36-37 頁を参照)。

図2：話者による改変から言語変化への移行モデル
(Milroy 1992: 170 頁、日本語訳は高田)



言語的改新 (innovation) が最初に起こる話者は、集団の中で周辺のなところに位置していて、二つ以上の集団とゆるい繋がりを持っている。その改新は、社会

的ネットワークを通じて、集団の比較的中心部にいる話者に伝わり、緩やかに採用される。これが、なんらかの「社会的制約の進展」によって一気に、「S字型曲線」¹⁷⁾を描くようにして広がることによって、その集団全体へ普及する。その段階では「同質的」(homogeneous)ではなく、「異質的」(heterogeneous)ないし「可変的」(variable)な状態が存在していることになるが、これは決して無秩序であるわけではなく、「整然とした異質状態」(orderly heterogeneity)が存在しているとミルロイは見る。この「整然とした異質状態」こそが言語変化が進行中であることを示していて、それが結果として後になり(言語学者によって)言語変化として観察される。ミルロイが言語変化は「社会的コンテキストにおける話者の活動の所産」(Milroy 1992: 4頁)であると述べたのは、以上のことを指している。

このモデルで考えると、とりわけ若者層である第三、第四世代のトルコ系移民のドイツ語の状況は現在のところ「整然とした異質状態」を呈していて、これを今から20年、30年後になって言語学者が観察し直したときに、言語変化の前段階として解釈し直せるものになるのかもしれない。トルコ系移民の話す「異質的」なドイツ語は、メディアを通じて間接的に、またトルコ系移民から直接的にドイツ人の間に逆輸入されつつあるという点で、興味深い「越境」を遂げているのである。ピジン語、クレオール語研究の対象として「トルコ=ドイツ語」の今後に注目していきたい。

資 料

- 1 Murat und Aische gehen durch Wald, auf Suche nach korrekte Feuerholz.
Aische fragt Murat: „Hast du Kettensäge, Murat?“
Murat: „Normal! Hab isch in meine Tasche, oder was!?“
Auf der Suche nach korrekte Baum, verirren sie sich krass in de Wald.
- 5 Murat: „Ey scheissse, oder was!? Hast du konkrete Plan, wo wir sind, oder was!?“
Aische: „Ne scheissse, aber isch riesche Dönerbude!“
Murat: „Ja faaaatt!“

17) 「S字型曲線」とは、グラフの縦軸に数量、横軸に時間の経過を置いてグラフを作ると、Sの字の曲線に見えることから命名されたものである。つまり、変化の進行が初期の段階では遅く、ある時点で急速に増加し、(普及が進むと)また進行が遅くなる。

Aische: „Normal, da vorn an den Ecke!“

So fanden schliesslich dursch Aisches korrekte siebte Döner-Such-Sinn den Dönerbude. Sie
10 probierten von jede Döner.

Plotzlich kamm voll den krasse Frau und fragt: „Was geht, warum beisst ihr in meine
Haus?“

Als Strafe sperrte den Hexe Murat in krass stabilen Kafig.

Zu Aische sagte sie: „Du Frau, du kochen fur misch! und verkaufen die Döner an den
15 Thecke.“

Murat wurde gemastet bis korrekt fett fur Essen.

Doch ein Tag hatte Aische einen fixe Idee. Sie fragte:

„Wie geht den mit den Dönerbrotofen?“

Hexe: „Was geht? Bist du scheissse im Kopf, oder was?“

20 Aische: „Normal, isch hab kein Plan, zeigen mal, wie geht!“

Hexe: „Machen das! Komm her und mach den Augen auf!“

Aische: „Korreckt!“

Den Hexe buckte sisich, um den Dönerrofen anzuschmeissen. In den Augenblick Aische
kickte mit korrekten Kick-Box-Kick in die fette Arsch.

25 Den Hexe sagte: „AAAhh, scheissse, was geht? Isch fall direkt in die Scheisendreckofen.
Oder was! Aah isch hab krasse Schmerzen!“

Aische freute sisich und sagte:

„Korrekt, den Alte ist konkret Tod!“

Murat: „Ey Aische, krasse Idee! Hol misch aus die scheiss Kafig, Alde!“

30 Aische: „Normal, oder was!“¹⁸⁾

(訳)

ムラートとアイシェは森（を）抜けて、イイ感じの薪（を）探し（に）出た。

アイシェはムラートに訊く。「チェーンソー（ソー）持ってる、ムラート？」

「もちろん！持ってる、俺のカバンの中へ（俺のカバンの中に入っている。）」

イイ感じの木（を）探している途中、ふたりはヤバいぐらい森（で）迷った。

「マジ、クソじゃね？お前、俺らが今どこか、分かってるんじゃない？」

「ヤ、分かってねえよクソ！でも、何かケバブ屋っぽい匂いする。」

18) Der Weg Portal für Deutschlernende.

「だな、いえええええい！」

「普通に。あそこの角で（に）！」

そのようにしてとうとうアイシェのイケてるケバブを見つける第7感によっち（よって）（ふたりはケバブ屋を）見つけた。ふたりはどのケバブも試してみた。とつぞん（突然）マジでヤバい女が来て（来て）尋ねてきた。「何てこった、なんであんたら私の家を（で）噛んでるんだい？」

罰として魔女を（は）ムラート（を）ヤバくがっちりしたおろ（オリ）に閉じ込めた。アイシェにはこう言った。「おい女、お前は料理する。わたすの（私に）。そして売る。ケバブを売り台で。」

ムラートは太らされた。食べるの（ために）イイ感じ（に）なるぐらいまで。

でもある日、アイシェは機敏なアイデアがあった。アイシェは言った。

「ケバブのパンはどう？」

魔女。「何だって？お前の頭、クソになっちまったのかよ？」

アイシェ。「普通だし。私は分からないわ。（あなたが私に）どうなるか見せる、でしょ？」

魔女。「やる、それ！こっちに来て、目（を）開けて見てな。」

アイシェ。「イイね！」

魔女は、ケバブのカマドを動かすために、頭を曲げた。その瞬間、アイシェはイイ感じのキックボクシングっぽいキックを魔女のでぶったケツにお見舞いした。

魔女へ（は）、言う。「ああああ、クソ！何しやがんだ。まっすぐクソ汚いオープンに落ちちまう。じゃね？ああ、ヤバイくらい痛い。」

アイシェは喜ぶい（び）、言った。

「イイ感じ！その老婆は完全に死んだ！」

ムラート。「オイ、アイシェ。イケてる考えだな！こんなクソのおろ（オリ）から俺を出してくれよ。」

アイシェ。「当然だし。」

参考文献

- Androutsopoulos, Jannis (2000): From the streets to the screens and back again. On the mediated diffusion of ethnolectal patterns in contemporary German. Paper presented at the ICLaVE I Conference, Barcelona June 29, 2000 (IdS Mannheim).
- Auer, Peter (2003): ‚Türkenslang‘. Ein jugendsprachlicher Ethnolect des Deutschen und seine Transformationen. In: Häcki-Buhofer, Anne (Hg.): *Spracherwerb und Lebensalter*. Tübingen: Francke, S. 255-264.
- Auer, Peter/ Dirim, İnci (2005): Zum Gebrauch türkischer Routinen bei Hamburger Jugendlichen nicht-türkischer Herkunft. In: V. Hinnenkamp/K. Meng (Hrsg.), *Sprachgrenzen überspringen. Sprachliche Hybridität und polykulturelles Selbstverständnis*. Tübingen: G Narr, S. 19-49.
- Bundesamt für Migration und Flüchtlinge (2010): Ausländerzahlen 2009. Nürnberg: Bundesamt für Migration und Flüchtlinge.
(http://www.bamf.de/cln_170/nn_442496/SharedDocs/Anlagen/DE/DasBAMF/Downloads/Statistik/statistik-anlage-teil-2-auslaendezahlen.pdf, zugegriffen am 28. 12. 2010).
- Deppermann, Arnulf (2007): Playing with the voice of the other: Stylized *Kanaksprak* in conversations among German adolescents. In: Auer, Peter (Hg.): *Style and Social Identities: Alternative Approaches to Linguistic Heterogeneity*. Berlin/ New York: Mouton de Gruyter, S. 325-361.
- Drosdowski, Günther (1976): *DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in sechs Bänden*. Band 4. Mannheim/ Wien/ Zürich: Dudenverlag.
- Eurostat (2006): *Statistik kurz gefasst. Bevölkerung und Soziale Bedingungen. 8/2006. Die ausländische Bevölkerung in den Mitgliedstaaten der EU*.
(http://www.eds-destatis.de/de/downloads/sif/nk_06_08.pdf, zugegriffen am 22. 12. 2010).
- 浜崎桂子 (2005) 「移民たちの『声』を書きとめる試み」〔『神戸外大論叢』第 56 号、11-25 頁〕。
- 平高史也 (2008) 「ドイツにおける移民の受け入れと言語教育—ドイツ語教育を中心として」〔『日本語教育』第 138 号、43-52 頁〕。

- 和泉田大介 (2006) 「想像上の境界としてのトルコとドイツ—ファティ・アキン『愛より強く』の現代性」 [『國文學』 第 51 号、62-69 頁]。
- Keim, Inken (2002): Sozial-kulturelle Selbstdefinition und sozialer Stil: Junge Deutsch-Türkinnen im Gespräch. In: Keim, Inken/ Schütte, Wilfried (Hg.): *Soziale Welten und kommunikative Stile: Festschrift für Werner Kallmeyer zum 60. Geburtstag*. Tübingen: G. Narr, S. 233-259.
- Keim, Inken (2007): *Die "türkischen Powergirls": Lebenswelt und kommunikativer Stil einer Migrantinnengruppe in Mannheim*. Tübingen: G. Narr.
- 国立教育政策研究所 (2002) 『生きるための知識と技能』 ぎょうせい。
- Milroy, James (1992): *Linguistic Variation and Change: On the Historical Sociolinguistic of English*. Oxford: Blackwell.
- N.N.: „Is voll krass eh“ - Neue Trends in der Jugendsprache.
(„Der Weg Portal für Deutschlernende“,
<http://www.derweg.org/aktuell/deutschland/vollkrass.html>, zugegriffen am 3. 12. 2009)
- 野中恵子 (2007) 『新版：ドイツの中のトルコ移民社会の証言』 つげ書房新社。
- Reich, H.H. (2001): Entwicklungen des Unterrichts in Deutsch als Fremd- und Zweitsprache in Deutschland. In: Burkhardt, Armin/ Steger, Hugo/ Wiegand, Herbert Ernst (Hg.): *Deutsch als Fremdsprache*. Berlin/ New York: de Gruyter, S. 56-68.
- Schulte von Drach, Markus C.: Jugendsprache - Yalla, Lan! Bin ich Kino?
(„sueddeutsche.de“,
<http://www.sueddeutsche.de/wissen/jugendsprache-yalla-lan-bin-ich-kino-1.911134>, zugegriffen, am 3. 12. 2009)
- 下宮忠雄、川島淳夫、日置孝次郎 (1985) 『言語学小辞典』 同学社。
- Statistisches Bundesamt (2010a): *Ausländische Bevölkerung, Ergebnisse des Ausländerzentralregisters*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.
(<https://www-ec.destatis.de/csp/shop/sfg/bpm.html.cms.cBroker.cls?cmspath=struktur,vollanzeige.csp&ID=1025396>, zugegriffen am 22. 12. 2010).
- Statistisches Bundesamt (2010b): *Bevölkerung und Erwerbstätigkeit. Bevölkerung mit Migrationshintergrund – Ergebnisse des Mikrozensus 2009*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

(<https://www-ec.destatis.de/csp/shop/sfg/bpm.html.cms.cBroker.cls?cmspath=struktur,vollanzeige.csp&ID=1025903>, zugegriffen am 22. 12. 2010).

菅利恵 (2008) 「ドイツにおける『ドイツ-トルコ』二言語教育—複言語主義とドイツ語教育のはざままで—」〔京都大学大学院独文教室『研究報告』第 22 号、133-144 頁〕。

高田博行 (2001) 「ドイツ語・若者ことばの世界—語場で意味ごっこする若者たち—」〔関西大学ドイツ文学会『独逸文学』第 45 号、33-78 頁〕。

高田博行 (2009) 「歴史社会言語学の拓く地平—一人の姿が見える言語変化」〔『月刊言語』2009 年 2 月号、34-41 頁〕。

八谷まち子 (2007) 『EU 拡大のフロンティア—トルコとの対話』信山社。

Zaimoglu, Feridun (1995): *Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*. Berlin: Rotbuch Verlag GmbH.

(たなか・しょうた 学習院大学大学院人文科学研究科博士前期課程)

Wem gehört „Kanak Sprak“, das Deutsch der Türkischstämmigen?

Mischung und Grenzüberschreitung einer Sprachvariation

SHOTA TANAKA

Heute hat Deutschland ungefähr 82 Millionen Einwohner. Der Gesamtanteil der Ausländer davon ist ca. 8,2 Prozent, also ca. 6,7 Millionen. Die Türkischstämmigen stellen dabei die Mehrheit dar, mit einer Zahl von 1,65 Millionen. Die meisten türkischstämmigen Migranten kamen nach Deutschland, um zu arbeiten und ein besseres Leben als in der Türkei zu führen. Diejenigen nämlich, die nach Deutschland kamen, gehörten in der Türkei auch eher der Unterschicht an und gingen in der Türkei meist nicht zur Schule. Dadurch, dass Deutschland 2000 bei der PISA-Studien vor allem in Nordrhein-Westfalen, wo die meisten Migranten leben, schlecht abschnitt, gibt es in Deutschland immer wieder Diskussionen, dass man sich jetzt mehr auf die Bildung der Migranten konzentrieren sollte. Außerdem bleiben die türkischstämmigen Migranten meistens unter sich und ziehen in Großstädte, in denen mehr als zwanzigtausend türkischstämmige Migranten leben. Dort bilden sie oft ghetto-artige Gemeinschaften. Deswegen gibt es zwischen Deutschen und türkischstämmigen Migranten immer wieder Verständnisprobleme.

Auch in Bezug auf die Sprache gibt es spezielle Merkmale bei den türkischstämmigen Migranten. „In einigen deutschen Großstadtmilieus entwickeln sich bestimmte Formen des Türkischen, beziehungsweise der Sprache der türkischen Jugendlichen, zu prestigebesetzten Sprachformen für Jugendliche“ (Keim 2002: 233). Und diese Sprachform wurde vor allem Mitte der 90er bekannt durch Literatur von Feridun Zaimoglu, HipHopMusik, Film und Fernsehen wie z.B. Erkan und Stefan oder Mundstuh. Die türkischen Jugendlichen, vor allem die männlichen, sind laut obengenannter Typisierung angeberisch und machohaft, aggressiv und komisch, sprechen Kanak Sprak. Ka-

nak Sprak, eine der Sprachformen, ist vor allem durch Feridun Zaimoglu, einen türkischstämmigen Autor, bekannt geworden. In seinem ersten Buch, *Kanak Sprak: 24 Mißtöne vom Rande der Gesellschaft*, gibt er dem Begriff „Kanak Sprak“ eine Definition, und zwar folgendermaßen: „Der Kanake spricht seine Muttersprache nur fehlerhaft, auch das »Alemannisch« ist ihm nur bedingt geläufig. Sein Wortschatz setzt sich aus »verkauderwelschten« Vokabeln und Redewendungen zusammen, die so in keiner der beiden Sprachen vorkommen.“ (Zaimoglu 1995: 13) Seitdem nennen sich die türkischstämmigen Jugendlichen selbst stolz „Kanake“ und ihr Selbstbild hat sich positiv verändert.

Aber spiegelt Kanak Sprak eigentlich die Sprache der türkischstämmigen Migranten wider? In auf Kanak Sprak geschriebenen Texten, wie z.B. „Murat und Aische“ („Hänsel und Gretel“ als Kanak Sprak Version), kommen manchmal sprachliche Merkmale vor, die man nicht in der von den türkischstämmigen Migranten gesprochenen Sprache findet. Angesichts dieser Tatsache gehe ich davon aus, dass Kanak Sprak eine z.T. durch Medien stilisierte Sprache ist. Dabei hilft eine Grafik von Auer (2003), die die Sprachwandlung von „Türkenslang“ zeigt. Laut Auer wird der primäre Ethnolekt, der vor allem von türkischen Sprechern gesprochen wird, gerne durch Komiker oder Kabarettisten benutzt und dabei stilisiert. Die stilisierte Sprache wird dann vor allem von deutschen Sprechern weiter gesprochen. Aber es gibt auch Jugendliche, die in ihrem Lebensbereich türkischstämmige Migranten haben und daher mehr oder weniger mit deren Sprache aufgewachsen sind. Da findet eine De-Ethnisierung zum Soziolekt statt, d.h., die Sprache wird in naher Zukunft weiter als ein neuer deutscher Soziolekt gesprochen werden.

Das zeigt, dass Kanak Sprak nun durch Medien andere Merkmale in sich aufnahm und daher vom sogenannten Türkendeutsch etwas zu differenzieren ist. Jedoch bestätigt diese Konsequenz die Meinung von James Milroy, dass eine Sprache nicht stabil bleibt, und das zeigt, dass sich auch die Sprache weiterentwickelt, die die türkischstämmigen Migranten sprechen.